

# 「おす」と表現される東日本の穀物脱穀

— 東北地方の粃打ち作業「粃おし」を中心に

榎本 直樹\*

関東には、麦の穂を唐竿（連枷、クルリボウ）で打つことや、臼・杵で搗くことを「おす」と表現し、これらの作業をムギオシと呼称する地域があった。ムギオシは、埼玉県の一部では唐竿の作業をいうが、関東全体では臼・杵の作業をいう。これは、かつてさまざまな用具による麦の脱穀がおしなべて「麦おし」と呼ばれていたものの、近代にそれらが唐竿の作業と臼・杵の作業の二つに集約され、それぞれの作業に旧来の呼称が継承された結果であると推測した。それを受けて、東北の広い地域で稲の粃打ち作業がモミオシ・モミヨシ・モミヨウシなど「粃おし」に類する名で呼ばれていた事例を紹介しながら、「おす」脱穀が、千歯扱きなど「扱く」脱穀の導入後も存続し、独自の意義を持ち続けていたことを指摘した。

キーワード 麦打 稲扱 脱穀 芒 農具 民俗語彙 会津農書

## はじめに

動力機械の普及以前、埼玉県内の一部地域においては、麦の脱穀の際、麦穂を唐竿で「打つ」、麦穂や麦粒を臼で「搗く」、桶の中の麦粒を「踏む」といった作業が、いずれもムギオシ、ノゲオシなどと呼ばれ、それらの作業動作が「おす」と表現されていた。現代から見ると違和感があるが、麦にかぎらず、「粟おし」「稗おし」「蕎麦おし」など「〇〇おし」という穀物脱穀の作業呼称と、作業動作の「おす」という表現は、広く東日本各地に存在していた。

管見によれば、この穀物脱穀における「おす」という表現は、自治体

史や民俗調査報告書のほかには、方言辞典・国語辞典に「むぎおし」が断片的に載せられている<sup>1)</sup>だけで、これまで注目されたことはなく、ほとんど認知されていない。それは、これらが農作業の細部に関わるもので、しかもその存在が一部地域に偏っていたためであろう。

本稿では、「おす」に象徴される脱穀が、単なる地方の言葉の問題ではなく、技術の歴史的展開を考える上で重要なものと捉え、その観点から稲の脱穀作業や用具の呼称を見ながら、その特徴を把握してみたい。

## 一 麦の脱穀と「麦おし」

本題である稲の脱穀に取りかかる前に、麦の脱穀の分析から得られた

\*えのもと・なおき、埼玉大学教養学部非常勤講師、日本民俗学

ことを振り返っておこう。

麦脱穀は、まずは麦束から穂先を落とし、次に穂から麦粒を外すとともに麦粒先端の突起物である芒（ノギ、ノゲ、ノガ）を除去するという、二段階の作業によって行われた。小川直之氏は、近代の農務局などの報告書から日本全国の脱穀具・脱穀法を分析し、日本国内の脱穀法に、抜き落し法、穂叩き法、打付け法、焼落し法、穂搗き法、足踏み法、手揉み法の七とおりあることを指摘している。そして麦の脱穀の工程については、千歯抜き法（抜き落し法の一つ）、焼麦法、打付け法などによる一次脱穀と、穂叩き法、穂搗き法による二次脱穀という二段階五種類に整理している。関東の民俗実態に即すと、これに足踏み法が加わって、二段階六種類となる。これらの作業工程を並べ、そこに「〇〇おし」とそのほかの代表的な呼称を加えると、次のように表すことができる。

一次脱穀（麦束から穂を分離する作業。ABCからの一択となる）

A 打付け法 麦打ち台に打ち付けて麦の穂を落とす

〔呼称例〕ムギウチ、ハシゴブチ、サナオシ

B 千歯抜き法 千歯抜きで麦の穂を抜き落とす

〔呼称例〕ムギコキ、ムギコギ

C 焼麦法 火で麦の穂を焼き落とす

〔呼称例〕ムギヤキ、ヤキホ

二次脱穀（脱粒と脱芒の作業。各単独か、組み合わせによる）

D 穂叩き法 唐竿で穂を打つ

〔呼称例〕ムギオシ、ノゲオシ、ムギウチ、ボウチ

E 穂搗き法 臼・杵で搗く

a (Dの後処理) 〔呼称例〕ムギオシ、ノゲオシ、ヨツキ、

コオシ、ツノオシ

b (Dの代替) 〔呼称例〕ムギオシ

F 足踏み法 臼や桶、箆に入れて踏む

a (Dの後処理) 〔呼称例〕ノゲオシ、ツノオシ、ノゲオリ

b (Dの代替) 〔呼称例〕ムギフミ

それぞれの作業は、〔呼称例〕のとおり、さまざまに呼ばれるが、A打付け法、D穂叩き法、E穂搗き法、F足踏み法の四つには、「〇〇おし」という呼称が見られることがある。しかし、ADEFは、それぞれ「打ち付ける」「打つ」「搗く」「踏む」など、異なった動作の作業である。そのことは、穀物の脱穀に関わるさまざまな動作が、かつては広く「おす」と表現され、脱穀作業が「〇〇おし」と呼称されていたことが、名残ではないか。すなわち、脱粒・脱芒のために穀物を圧することが、おしなべて「おす」と表現され、その作業が「〇〇おし」と呼称されていた。しかし、一方で、「打つ」「うつ。ぶつ」など、よりの確な動作の表現に置き換えられることで、次第にその領域を狭め、近代には「〇〇おし」という語彙や、「クルリボウ（唐竿）でおす（打つ、叩く）」、「臼でおす（搗く）」という表現に、名残をとどめているのではないかと推測される。

ムギオシという呼称について見ると、埼玉県の一部ではD穂叩き法の唐竿の作業のことをいう。しかし、関東とその周辺では、山間地や離島も含め、ムギオシはE穂搗き法の臼・杵の作業をいい、幕末や近代の東京多摩地域の日記の記述に見られる「麦おし」「おしもの」も、臼・杵の作業のことであった。そのことから、かつては臼・杵の作業をムギオシとすることが、より広い地域に存在したと推測される。このムギオシは、唐竿の作業の後処理または代替の作業として、乾燥や選別を挟みつつ、収穫物を俵に収めるところに直結する、麦作の最終作業であった。

ムギオシに用いられた臼・杵は、稲作地域では「米搗き用」と呼ばれたが、畑作地域では「ムギオシ用」とされ、麦の脱穀や精白に用いられた搗き臼・搗き杵であった。ところが、搗き杵のような形態の横杵が堅杵に代わって普及したのは、十八世紀半ば以降で、それは米を大量に精白することを要因とした変化とされている。つまり、民俗調査で確認された近代の臼・杵によるムギオシは、十八世紀半ば以降に成立したものであることになる。

麦の二次脱穀が、もっぱら唐竿と臼・杵で行われた関東とは異なり、東北では一部地域にしか唐竿は普及せず、かわりに棒・槌・杵状の用具や臼・堅杵などによって、それが行われており、麦穂を槌で打つことをムギオシと称する地域もあった。古くは関東でも、東北のこれと同様であったと推測される。すなわち、それらの作業はおしなべて「麦おし」と呼ばれ、「おす」と表現されていた。近代にさしかかった頃、それらはおおむね唐竿の作業と、搗き臼・搗き杵の作業の二つに集約された。穂打ちの作業はもっぱら唐竿（D穂叩き法のムギオシほか）に収斂し、その後処理や代替としての脱粒・脱芒は搗き臼・搗き杵の作業（E穂搗き法のムギオシほか）となった。そのため関東では、両作業の一部にムギオシ呼称や「おす」という表現が継承されたと推測される<sup>3)</sup>。

さて、麦の脱穀は「麦打ち」、稲の脱穀は「稲抜き」と、一口に表現されることがある。麦には麦打ち台や唐竿で打つ印象が強く、稲には千歯抜きで抜く印象が強いからであろう。しかし実際には、「麦抜き」の後に「麦打ち」があり、「稲抜き」の後に「稲打ち」があった。そして関東には、「麦打ち」をムギオシと呼称する事例があった。一方、東北には、「稲打ち」をモミオシ、モミヨウシなど「稲おし」と呼称する事例が見受けられる。次章から、「稲おし」を通じて稲の脱穀を見直して

いきたい。

## 二 稲の脱穀と「稲おし」

### 「稲打ち」と「稲おし」

麦の脱穀を「麦打ち」ということは広く知られているが、稲の脱穀に「稲打ち」があることは必ずしも知られていない。『日本国語大辞典』を例にとると、「むぎうち 麦打」の項目はあっても、「稲打ち」の項目はない<sup>4)</sup>。『綜合日本民俗語彙』には、新潟県のモミガチ、佐賀県のモミタキという呼称も報告されているが、これらも『日本国語大辞典』には取り上げられていない。

一般に、稲の脱穀といって連想されるのは「稲抜き」であり、千歯抜きに代表される「抜く」作業である。脱穀の効率を飛躍的に高めた千歯抜きが「後家倒し」と呼ばれたという逸話は、よく知られている。そうした中で、今さらながら柳田國男氏の発言は、千歯抜きや脱穀機による「抜く」以前と以後の変化を示したものとして注目される。

穀物の穂の部分を広い筵の上などに集めて、棒で叩いて脱穀させる方法は、曾ては稲にも行はれて居た土地が有るらしいのである。それから他の一方に新しい稲扱機械が出来て、一日に沢山の稲を落すやうになると、つい抜き方がぞんざいに流れ、藁の穂にまだ若干の稲がくっついて残ることになり、それを集めて棒で打つて、今一度残りの稲を落す作業が必要になつて来るのである。関東平野では是をポッチャラウチ又はボウジブチなど、謂つて、以前の稲納の頃には厳格に言へば、是が稲作最終の作業であつた<sup>5)</sup>。

稲扱機械の導入によつて稲穂を棒で打つ作業は消えたが、その一方

で、扱きそこねて穂に残った籾を打つ作業―ポツチャラウチ<sup>8)</sup>が必要になった。「近き百年以内までは、貯蔵は多くの地方では籾を囲<sup>9)</sup>うことであった。籾摺りで玄米にする「糠を去る仕事は食事の準備」であった、本来は籾として収納するまでが稲作の作業であった。

籾の脱穀においては、脱穀の効率を高めた千歯扱きや脱穀機が目玉され、籾を「扱く」ことへの関心は高く、その研究も多いが、「籾打ち」への関心は低かった。実際には、近代においても「籾打ち」は行われた。「籾打ち」は、関東の麦作でいえば、一次脱穀として千歯扱きで扱いた後、二次脱穀として唐竿で麦を打つ「麦打ち」に相当するものである。関東では、「麦打ち」にも「籾打ち」にも、もっぱら唐竿が用いられたものの、東北には唐竿はあまり普及せず、「麦打ち」にも「籾打ち」にも、棒や槌、杵状の用具などが用いられた。

「籾打ち」の研究で唯一ともいえるのが、佐々木長生氏による福島県会津地方におけるモミヨウシの研究である。<sup>11)</sup> 会津では、稲籾の脱穀の「籾打ち」をモミヨウシといい、この作業と用具について、佐々木氏による詳細な調査と分析がなされてきた。しかし、その研究はそれ以上の地域的広がりを見せなかった。それはモミヨウシが会津独特のものとして捉えられ、他地域の「籾打ち」と比べられることがなかったからである。しかし、近年、久野俊彦氏がモミヨウシボウを「籾押し棒」と明示したことで、<sup>12)</sup> にわかに、東北における「籾打ち」の地域呼称「籾おし」と、モミヨウシとのつながりが見えてきた。

以下、各県の「籾おし」に関わる作業をたどってみたい。その際、これまでこうした観点で事例が取り上げられることがなかったことから、資料の提示自体も重要と考え、統一性のないまま、雑多な資料から類似事例を列挙することをお断りしておく。

ここで、図1「籾打ち、籾おしの用具」を掲げておく。これは前述の佐々木氏の研究文献のほか、東北・関東各地の文献の写真や図から「籾打ち」用具を模写し、その概形を示したもので、以下の本文中の用具の参考となるものである。もともと、元文献には図が掲載されていない場合が多く、本文とこの図とはあまり連携していない。またこの図は、用具を示す目的のため、「籾おし」呼称にこだわらず、モミウチ、モミソチ、モミタキなども含めた。本来、作業と用具には厳密な比較検討が必要であるが、ここでは広範囲にわたる共通性を一覧することを優先した。

### 青森県の「籾おし」

青森県は、最も「籾おし」の事例が色濃く見られる地域である。

津軽地方では、かつて籾の脱穀は、カラミオトシと称して臼に稲束を叩きつけて穂を落とす重労働であったが、明治にセンコキ（千歯扱き）が入って、作業が前より楽になったという。<sup>13)</sup> 打付け法から、千歯扱き法への転換である。その後、足踏み脱穀機が入ってきたのは、北津軽郡鶴田町では、昭和の初め頃<sup>14)</sup>という。東津軽郡外ヶ浜町旧平館村では、足踏み脱穀機は大正から昭和の初めに青森から村に二〇台入ったのが始まりで、センコキの一〇倍の能率であった。<sup>15)</sup> このように脱粒は効率化できたが、当時の籾は「エガ籾」（有芒種）<sup>16)</sup>であったので、籾を扱いた後に、「モミおし棒」で叩く必要があったという。

北津軽郡鶴田町旧水元村『水元村誌』に、「籾押し」作業は次のように説明されている。

毎朝夜の明けぬ前から小さなカンテラ一つ明光で稲扱を使ってゴリゴリやり、次いで籾押し<sup>17)</sup>となり、篩にかけ唐箕にかける。梲ではかつて六斗づゝ俵に詰める……此の一完した仕事を日返籾<sup>18)</sup>という。明

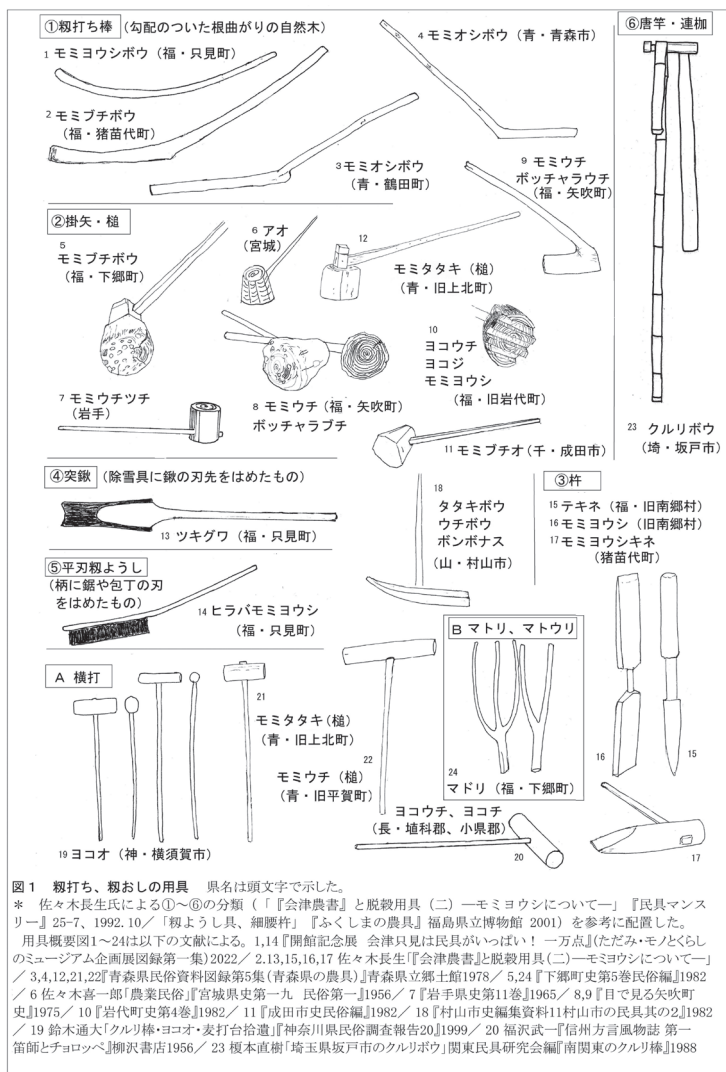


図1 籾打ち、籾おしの用具 県名は頭文字で示した。  
 \* 佐々木長生氏による①～⑥の分類（『『会津農書』と脱穀用具（二）—モミヨウシについて—』『民具マンスリー』25-7、1992.10 / 『籾ようし具、細腰杵』『ふくしまの農具』福島県立博物館 2001）を参考に配置した。  
 用具概要図1～24は以下の文献による。1,14『開館記念展 会津只見は民具がいっぱい！—万点』（ただみ・モノとくらしのミュージアム企画展図録第一集）2022 / 2,13,15,16,17 佐々木長生『『会津農書』と脱穀用具（二）—モミヨウシについて—』 / 3,4,12,21,22『青森県民俗資料図録第五集（青森県の農具）』青森県立郷土館1978 / 5,24『下郷町史第五巻民俗編』1982 / 6 佐々木喜一郎『農業民俗』宮城県史第一九 民俗第一1956 / 7『岩手県史第11巻』1965 / 8,9『目で見える矢吹町史』1975 / 10『岩代町史第4巻』1982 / 11『成田市史民俗編』1982 / 18『村山市史編集資料11村山市の民具其の2』1982 / 19 鈴木通大『クルリ棒・ヨコオ・麦打台拾遺』『神奈川県民俗調査報告20』1999 / 20 福沢武『信州方言風物誌 第一節師とチロップ』脚沢書店1956 / 23 榎本直樹『埼玉県坂戸市のクルリボウ』関東民具研究会編『南関東のクルリ棒』1988

日の準備まで整えて其日は終る。稲こきから籾おしは仲々つらい仕事である。百姓仕事で何が一番苦しいかと問えば、言下に籾おし、と答える。手足に大きな痺がいくつも切れて生血が出たり、赤く口をあいてるのは見たさげでも、ウンザリする位、(中略) 其手足で冬の未明から起出で、目も口も鼻も埃だらけ(下略)。

この報告では、「籾おし」の内容はわからないが、『鶴田町誌下』にはこの記事が再録され、庭に広げられた籾を、向かい合って棒状の用具で打つ男女の挿絵が添えられている。<sup>20</sup> 鶴田町のモミオシボウは、『青森県民俗資料図録第五集（青森県の農具）』に収録されており(図1の①籾打ち棒3)、自然木を利用した「く」の字形である。

次に、東津軽郡外ヶ浜町旧平館村の報告には、次のようにある。

イガイネは、イガを除かないと唐箕にかけられないので、籾押し棒や槌で、モミ押しをした。これが済むと、オハギをふるまう。<sup>22</sup>

「棒」と表現される用具は、図1の①籾打ち棒であるが、「槌」と表現される場合は、②掛矢・槌の類である可能性が高い。

平館村でも、作業の主眼がイガの除去にあるとしており、これは次の五所川原市旧三好村でも同様であった。

明治大正の初めはエガの稲であったから籾押棒にてたつき、更にツリ竹にて屑と籾とを打つ離し、籾通しにて籾と藁屑とを分離し、唐箕にかけて糞とほくりを飛ばし、六斗入りの籾俵を作る。<sup>23</sup> いずれにしても、「籾おし」や選別

作業を経て、粃を俵に収めて作業が終わった。北津軽郡中泊町旧中里町では、次のとおりであった。

「せんこぎ」が出来、楽になったが、落した粃が「つなぎ」に分離しないものも多くあり、また有芒種であるので之を『粃おし棒』で打つのであった。<sup>24)</sup>

ここでは、芒とともに、分離しない粃の処理を対象としている。同様に青森市旧南津軽郡浪岡町では「切れ穂」（穂切れ）が問題となっており、「粃通し」（篩）で粃と藁屑や「切れ穂」とを区別し、篩上に残ったものを「カラミ棒でこなして粃にする」。この「カラミ棒」を「粃おし棒」ともいう。<sup>25)</sup>

『倉石村史』によると、三戸郡五戸町旧倉石村では、「モミオシボウ（タタキ棒）」や「モミタタキ（槌）」で粃を叩いて、イガを落とし、また、メイゴ（穂切れ）を処理した。写真によると、前者は図1①粃打ち棒3・4に似たもので、後者はA横打21によく似たものである。<sup>26)</sup>

一九三八年刊行の『青森県の稲作』という技術書では、種粃の採取に「粃押棒」の使用が奨励されており、この呼称が県内に広く用いられていたことがわかる。説明はないが、①粃打ち棒をさすと考えられる。

種粃の調製には、（中略）在来の稲扱きを用ひ丁寧に扱き落し芒や穂切れ等を去る為め粃押棒と称するものにて叩くがよい、最もこの場合には下に藁席を敷き、粃押棒も極く小さいものを作り丁寧に打つ叩くがよい。<sup>27)</sup>

さて、以上の報告は一九八〇年代までのものであるが、近年にも報告があり、棒や臼と竪杵などで穂切れや芒について、脱粒や脱芒することを「〇おし」といつていることがわかるので列挙する。

・ 枝付きの粃は、モミオシ（自然木の幹と枝を利用した棒状の農具）

で叩いた（北津軽郡中泊町長泥）。<sup>28)</sup>

・ 有芒種の粃は、ノギを取るために、「キギ（縦杵で、オナゴキネともいう）を使って臼で搗いた。これをコメオシ」といった（むつ市旧下北郡大畑町関根橋）。<sup>29)</sup>

・ 有芒種の粃はノギを取るために、臼に入れ、「キギ（縦杵）で軽くオシて（搗いて）落とす」。「粃が枝付き状になっているものもオシ」た（むつ市旧下北郡川内町宿野部）。<sup>30)</sup>

青森県には、広範囲にわたって「粃おし」「粃押棒」などの呼称があり、これらの作業は、有芒種の脱芒とともに、穂切れ―穂枝に付いた粃の処理―柳田氏のいうボツチャラウチーのために、行われていた。

以上の事例では、棒・槌状の用具と臼・杵は単独の作業であるが、西津軽郡深浦町関では、棒・槌状の用具と臼・杵の作業にわたる場合があった。

粃をモミオシボウでたく。これは三人くらいでまわりながらたたいた。たたいた粃をトオシにかけてワラシビをとり除く。さらに臼に入れてたたき、トウミにかける。<sup>31)</sup>

これは、関東の麦の二次脱穀の二段階作業と比較されるものである。

#### 岩手県の「粃おし」

岩手、宮城両県は、「粃おし」の報告の少ない地域である。『岩手県史』によると、扱いた粃を土間に厚く敷き、上から軽い木槌で打ち叩いてノギを折る。その際、「粃打ち槌」という柄の長い槌（図1②掛矢・槌7）を用いる。ここでは「粃おし」ではなく、「粃打ち」というように見受けられる。しかしその一方で、「この木槌は、粟落し（アワオシと呼ぶ）や、稗落し（同上）や、その他にも使用」するといひ、粟・稗

には、「〇〇おし」という呼称が見られる。また、『盛岡市通史』でも、民家のニワと呼ばれる土間の説明において、「ニワは室内作業場で、稲こき・稲うち・粟おし・稗おし・そばおし・白搗き、米の精白などの作業<sup>(33)</sup>」をするといい、雑穀には「〇〇おし」呼称を用いている。

東北の民俗芸能の田植え踊り、春田打ちなどの演目の中には、田仕事を表現するものがあり、そこに「稲おし」が位置づけられている場合がある。岩手県にもそうした例は多く、たとえば、遠野市土淵町の田植え踊りには、稲刈り、稲運び、稲こきなどの演目とともに、「二十、稲おす」「きようからよう、日もよい、きねをそろえて」と歌うものがあり、市内各所に、「稲おす歌」「稲おし小唄」「稲おし歌」などがある<sup>(34)</sup>。農作業の「稲おし」の報告は見られないが、存在していたものと考えられる。ところで、一関市旧東磐井郡室根村折壁では、アオという槌状の用具による作業をノギオシといった。

稲こきには、せんばこきを使用し、こいたものをアオでたたいたのぎおしをする。多勢で普通左回りしながら歌をうってたく。たいたものをもみ通して通して貯蔵、普通は俵にいれて吊るした<sup>(35)</sup>。

同市旧西磐井郡花泉町では、ノゲオシという<sup>(36)</sup>。東北の報告で、稲の脱穀のノゲオシ、ノギオシはあまり見かけない。しかし麦の脱穀では、陸前高田市で「麦押」または「芒押」、奥州市旧胆沢郡胆沢町でノギオシといい、下閉伊郡岩泉町でムギオシという例がある。ムギオシは脱粒であり、ノゲオシ・ノギオシは脱芒であるが、作業としては一体化し不可分なものであつて、両者は同じ作業の表裏を示す呼称であつた。この両者の関係性は、稲の場合にもいえるのではないだろうか。

## 宮城県の「稲おし」

宮城県にも、岩手県同様に、アオという用具がある(図1②掛矢・植6)。『宮城県史』によると、アオは、穂についたままの稲を打って穂から落とす用具で、「木槌の大きなもの」であり、上部が狭く下部の広い、径一六〜二センチくらいの本体(杉材をよしとする)に、六五センチくらいの柄がついている。「これで打つことを『アオでおす』」といい、扱いた稲は、

アオを用い、各粒のノゲをおしてとり、トオシでとおして、ポツチャラと稲とにわけける。ポツチャラは風で吹き分け、再びアオでおし稲をとり、先の稲と合せてトウミで吹き分けて稲とシイナ稲とに分ける<sup>(38)</sup>。

という。大崎市旧遠田郡田尻町の『田尻町史』にも、『宮城県史』がほぼ同文のまま転載されている<sup>(39)</sup>。

『仙台市史』には、次のように記されている。

当時の主要品種だった「亀ノ尾」や「愛国」、「豊国」などは、現在の品種とは違っていずれにも稲に長いノゲがついていた。扱き落した稲を箆に広げ、アオやソリで叩いてノゲを落とす。この作業をアオ押しとかアオブチ(アオ打ち)といった。アオ押しがすんだら、稲通しと呼ばれる篩にかけて、稲と藁くずやごみを選別する。通しに残ったものをツタカといったが、このなかにはまだノゲの残った稲が混ざっているので、再度アオ押しをして篩にかけ、稲を選別していく<sup>(40)</sup>。

「稲おし」が「おす」対象を示した呼称であるのに対して、「アオ押し」は用具名を冠したものである。ソリとは、①稲打ち棒をさすものであるうか。ツタカは、ポツチャラである。

伊具郡丸森町では、扱いた稲を「アオと称する杵形のものでつき、こ

れを『籾よし』と言った<sup>(42)</sup>という。このアオは、写真では、「杵形」というより、図1の②掛矢・槌のように見える。隣の白石市では、この作業をモミヨス<sup>(43)</sup>といった。いずれも山形、福島両県に近い。

### 秋田県の「籾おし」

秋田県には、青森県同様に多くの事例が見られる<sup>(44)</sup>。

秋田県大仙市の旧仙北郡神岡町の農民が、明治三十四年頃の農作業を記した中に、次のようなものがある。

稲五十束扱き終ると之を庭に拵げもみおしとてもみをたたく。この道具を我村にてはもみおし棒またはシナイとも言ふ。これは根曲の一本木にて作つた少しそりみのあるものである。これにて三ツ拍子でたいたものである<sup>(45)</sup>。

「もみおし棒」は「シナイ」ともいい、「根曲の一本木にて作つた少しそりみのあるもの」という。図1の①籾打ち棒であろう。

農業に従事しながら、アチックミュージアムから複数の著作を発表していた吉田三郎氏は、男鹿市の旧南秋田郡脇本村出身であり、「籾おし」について触れている。センバンとは千歯扱きのことである。

センバンでこいた稲穂はばらばらになっていない。穂先が切れて落ちる部分が多い。従つてそれを棒で叩いて粒を落すのである。ほんとうは籾押しではなく籾落しである。でも村ではこれを籾押しという。その道具がいかにも押すようにしてたくからである。厚さ三寸、長さ一尺二寸、巾七寸位の板切に五尺位の棒を打込んだものである。この道具で、土間にひろげた籾を叩くのである。それを三人四人五人と数多くの人で叩くとすると、その調子を合わせないといけない<sup>(46)</sup>。

「ほんとうは籾押しではな」いが、「いかにも押すようにしてたく」という部分は、「おし」という呼称への違和感を示す貴重な部分である。吉田氏は、この作業の用具をジョゲと呼んでいる。

餅米の籾には毛が付いてゐるのでそれをジョゲで押して毛を落すのです。その昔カナ扱きをする当時全部の籾を押ししたのですが、今日機械扱きをする様になつてからはこの籾押しも毛稲を除いては押しなくとも良くなつたので、それだけ楽になりました<sup>(47)</sup>。

前の記述のセンバンから、機械扱きに変わったことにより、有芒種の脱芒だけの作業となつたことを述べている。

旧神岡町で「三ツ拍子」、旧脇本村で「調子を合わせ」て作業したというように、大仙市旧仙北郡西仙北町では、

籾の上を「籾押棒」（六尺位の長さ経三寸位の丸太棒の片面を平面にした棒）で拍子付けてたたきまわる。稲の穂のままのものがなくなるまで続ける<sup>(48)</sup>。

とある。このように複数の者で作業の調子を合わせることが、横手市十文字町谷地新田の場合は、次のように報告されている。

穂が千切れたりするので籾押槌で打ち一粒ずつはなす。この籾押しには二、三人でソラツホイ、ホイホイ、ソラツツと掛声を掛けて、お互いに気合いを入れながらニワ一杯にひろげた籾をトントントントンついていた<sup>(49)</sup>。

秋田市旧河辺郡河辺町も同様であるが、複数人で調子を取りながら、ごみと埃にまみれた作業であつたという。

籾が適当にたまると「籾おし」の作業をする。籾にはまだ藁から離れないのがたくさんあるのでこれを離して一粒一粒にするため、一面にしかれた籾を上から、籾おしの、しない棒でたたきつける。



棒といつても柄の方と、たたく方に分かれた、「く」の字形のものである。これを三、四人で調子を合せながらたたく時は勇ましいようだが、屋内でもうもうとゴミの立つ中で息をはずませながらする作業は決してよいものではなかった。<sup>(50)</sup>

ここでは、脱粒を目的としているが、同じ秋田市でも旧南秋田郡金足村では、この作業をノゲオシといっている。一方、由利本荘市旧本荘市内では、穂切れの粃をヒゲといい、ヒゲオシという柄の木の根を用い、これを叩いて粃を分離した。<sup>(51)</sup> 仙北市旧仙北郡西木村では、「千歯扱でこいた稲を粃押槌でよく押ししてから粃を選別する」という。<sup>(52)</sup>

これらの作業の目的の説明は脱粒か脱芒か一定しないものの、用具は、ジョゲ、シナイ、シナイボウ、モミオシボウ、モミオシツチ（モミオシツチ）などといい、根曲がりの自然木を利用した「く」の字形のものや、丸太の一面を平らにしたもの、板に棒をさしたものであり、棒や槌などと表現されている。そのほか、大仙市旧仙北郡中仙町の『中仙町史文化編』には、「こき下ろした穂先は粃押という簡単な木杵で粃を打ちつけ一粒一粒に打ちおとす」とあり、「簡単な木杵」という表現がされている。しかし実際に掲載された写真では、土間に敷かれた粃を、穀搗き杵のような大きな杵で搗いている。この作業に、棒、槌、大小の杵などが用いられていたことがうかがえる。

なお、横手市平鹿町の郷土誌の記述からは、「粃押槌」による作業が、種粃採取の利点からも推奨されていたことがわかる。

稲扱ニテ全部扱キ落シ、先ツ粃押槌ニテ静カニ数回打ツ。之ヲ篩ニテ二、三回ニ通シタルノ後、唐箕ニ掛ケ種子用トナシモノナリ。<sup>(53)</sup>

秋田県文書でも、「種を採らんとする稲は、(中略)千扱を以て扱落し、粃押槌を以て軽く打落し」として、種粃採取に「粃押槌」を用いること

が説かれている。

### 山形県の「粃おし」

山形県には、脱穀の作業実態の資料は少ないが、呼称の資料はある。『山形県方言辞典』によると、西置賜郡小国町では、稲扱きで「もげた」穂をホダギレといい、それを集めたものをチグロという。チグロを白に入れ、モミヨシギネで搗いて粃を落とし、粃と穂の茎とをふるい分けることをチグロヨシ、モミヨシという。ホダギレは穂切れ、チグロはポツチャラに類するものであり、その処理が作業の対象であった。

以下、同書のモミヨシ関係の用具の記述を掲げる。

モミヨス からざお。西村本郷。

モミヨスボー 東村豊田。西村溝延・高松・大谷。北村横山。

これらは用具にモミヨスという呼称が用いられた例である。語彙に続くのは、西置賜郡、東・西・北村山郡、飽海郡など地名の省略形である。

モミヨシ、モミヨスは、「モミ」と「オシ」が連続することで *nomiyoshi* が *nomiyoshi*, *nomiyosu* に変化したものである。後述する福島県のモミヨウシ、ムギヨウシも、「モミ」「ムギ」を受けたための、*-joshi* から *-iyoushi* への変化である。しかし、チグロヨシは違う。ただ同書によると、「ヨス」そのものが「叩く」という意味で用いられていたという。

ヨ・ス 叩く。なぐる。「おればーんだもの」「ヨシタ」(叩いた)。

山形。東村千布・楯山。西村寒河江。北村東郷。<sup>(54)</sup>

その理由はともかく、ヨスがヨスリに変化した事例もある。

ヨスリキギ 連枷(大豆などをうって豆を飛ばす棒)。飽海遊佐。

ヨスリキネ 同右。飽海遊佐。

ヨスリボー 同右・東田大泉<sup>65)</sup>

以上、作業呼称のモミヨシ(別名チグロヨシ)が西置賜郡に、用具呼称のモミヨスが東・西・北村山郡に、ヨスリが飽海郡、東田川郡に分布している。

実作業についてのわずかな資料では、旧飽海郡・酒田市でも作業をモミヨシという<sup>66)</sup>。旧東置賜郡・南陽市にも「粃よし」作業があり、

稲こきにしても、粃先には「芒」があるし、一本の穂のままだったり、中には藁のままのものもある。粃摺機にかけるには粃が一粒ずつ分かれていないとうまくかけられない。そこで、不要なものを除いて粃摺りをしやすくするために「粃よし」をした。筵の上に稲こきしたものを集め、杉の曲った木でつくった「そそろ棒」で叩いて粒毎に打ち落すのである<sup>67)</sup>。

という。この脱粒・脱芒作業に用いられた「そそろ棒」とは、『南陽市史民俗編』によれば、「手ごろな曲がった木を山からさがして作ったもの」とされ、**図1①**「粃打ち棒1」に似たものの写真が掲載されている<sup>68)</sup>。

鶴岡市では、「粃をモミヨシキギでよして、粃とちりを分け、粃とうし、米とうしにかけて玄米に仕上げた<sup>69)</sup>」といい、モミヨシキギで粃を「よし」という。このモミヨシキギや冒頭のモミヨシキギは、**図1**の**③**の類であろうが、実態はわからない。「モミヨス からざお」は**⑥**唐辛・連枷である可能性があり、豆脱穀用のヨスリキギ以下も「連枷」とあるものの、実態は不明である。

### 福島県の「粃おし」

福島県の場合、県の北部に「粃おし」に類する呼称がある。福島市内では、「粃打ち」をモミブチといい、麦の脱穀は「麦ようし」

という。しかし立子山地区では、「ざる頭(アオ)」という用具で、「粃」についている『のげ』をうちとり、『つたかとばし』とあって風力を利用して藁やのげを飛ばす作業を「粃ようし」といったという<sup>64)</sup>。

喜多方市旧耶麻郡山都町では、「粃よしは昔の稲は粃にノゲという毛があり、これをとるために棒で打ったり大きな臼でついたりした。これも夜業であった<sup>65)</sup>」といい、「粃よし」といつている。

『岩代町史』によると、「二本松市旧安達郡岩代町の「粃ようし」は、こき落した粃は、まだのげがついていたり、藁くずがついているので、これを庭に藁を敷き広げてよく乾燥し、乾いたところで、「横打」(長折)または「横ち」(杉沢)でよく打ち、のげをとりおとして「箕」でふき、のげや藁くずをとばしてしまふ。

という作業であった。宮城県のアオ同様の用具(**図1②**掛矢・槌10)が、「粃ようし」「横打」「横ち」などと呼ばれている<sup>66)</sup>。

以上は他県のものとは大差ないが、以下の南会津郡の事例は特徴的なものである。南会津町旧南郷村の「粃ようし」の作業は、三晩くらい扱きためた粃について、

粃の小山のテッペンに登って、ツキ鍬で力いっばいつきならず。次は粃打棒(柄のついた板金で作ったもの)で適当にセドツタ粃を二人向きあつて調子とつて叩く。手ですくつてサラサラしたらヨウセタ証扱(下略)<sup>67)</sup>

だという。「粃打棒」とは、「モミヨウシ(ちりうち用具)」と呼ばれ、五〇〜六〇センチの大きな包丁状の刃に、一メートルほどの柄がついたもので(参考 **図1⑤**平刃粃ようし)、各戸に一丁は備えられていた。

一方、「ツキ鍬」というのは、雪かき用具であるコウシキベラに鍬の刃先をはめこんだ、踏鋤状のもの(参考 **図1④**突鍬)であり、「二三人

で作業するために、複数備えられていたという。「ツキ鋏」で籾の山をつきならした後、数人がかりで、モミヨウシで叩いたのである。

次に、只見町旧石伏の報告では、

籾がついて取れないものもあり、「籾ようし」といつて筵の上に穂切れたものを広げ、アラとよばれる扱きかすも集めて打ち叩く。これを「あらこなし」ともいう。あらこなしをしたものを、もう一度籾ようしをする。本ようしともいう。籾ようしは、白の中に籾を入れ、手杵（細腰杵）で、尖がった方でつく。一白に三、四人で行う。籾ようしも夜に行い、根松を割って明かりにした。

とある。「あらこなし」の用具は文章にはないものの、「籾ようし」（④突鋏）の写真が掲げられているので、これで打ち叩くのである。旧南郷村と同様に二段階の作業であるが、打つことと臼・杵で搗く二段階の作業は、関東の麦の二次脱穀の二段階の作業と比較されるものである。

さて、貞享元年（一六八四）の『会津農書』上巻「稲扱并籾立」は、「日帰り米の籾立ハ、昼ノ八ツ下りより立て、扱たる籾を細腰杵を以てよふし」と記している。この後段は「扱いた籾を手杵で搗いて芒をとり」と現代語訳され、注では「よふし」は「芒を取る」とされている。<sup>20</sup>佐々木長生氏もこの記事を紹介し、円筒状につないで立てた筵に籾を保管するため、握り手部分がくびれた手杵と、クボウスと称する小さな臼で籾を処理したと、これを補足して説明している。会津では、「よふし」や「ようし」が、「芒を取る」という意味の地域独特の言葉として理解されてきた。<sup>21</sup>ただ、佐々木氏も注目し紹介しているように、『会津農書』下巻「農人郷談」には、「庄 ヨウフヘ 禾籾、芒麦等ノ籾ツキ。是関東ニテハ庄之春トスル也」とも記されている。「庄之春」は「おしの春」と現代語訳され、注では「芒のある籾や麦粒を、庄をかけて搗

くこと」と説明されている。『会津農書』では、会津の稲・麦の「籾」搗きが、関東の「庄」搗きに相当するとともに、それらが別の言葉で表されるものとして認識されていたのである。

さて「籾おし」や「おす」などに関わる事象は、現われかたや濃淡の違いはあるにしても、東北各県に存在していた。また、福島県に隣接する新潟県東蒲原郡阿賀町旧上川村では、「以前はモミヨシと称して、ムシロに籾を並べてモミヨシ棒と言う杵でたたいた」といい、周辺地域にも広がっている。図2「東北地方の籾打ちにおける「〇〇おし」呼称」は、各事例の分布を地図上に示したものである。ここには、「籾おし」は、各事例の呼称とともに、そのほかの穀物・豆の作業と用具における「〇〇おし」呼称を示した。東北に広くこうした呼称があることが一目瞭然である。そのうち、「籾おし」は、青森・秋田ではモミオシ、山形でモミヨシ・モミヨス、福島でモミヨシ・モミヨウシなどと変じ、後述するとおり関東ではほぼ見かけられない。その分布は意味ありげであるが、今後の資料の集積を待ちたい。

これまで見てきた東北の「籾打ち」「籾おし」は、籾を穂から落とす作業には違いないが、もっぱら有芒種の芒（ノゲ、イガ、エガ、ケ）の除去や、穂切れや夾雑物を含むもの（ツタカ、ボツチャラ、チリ、ホダグレ、チグロ、ヒゲ、メイゴ）など、一部の籾の処理に重点を置くものであった。

#### 関東の「籾おし」としてのノゲオシ、ツタッカオシ

管見によると、関東には「籾おし」を呼称とする民俗事例は見当たらない。そもそも「籾打ち」の民俗事例もごく少なく、これに関わる用具や作業に関する記事が散見されるのみである。しかし関東にも、「籾打



図2 東北地方の粳打ちにおける「〇〇おし」呼称

ち「粳おし」に相当する作業はあり、それらはクルリボウと呼ばれる唐竿によって行われていた。

たとえば、埼玉県坂戸市赤尾には、ノゲオシとツタツカオシという作業があった。ここは水害地であったため、昭和十五年頃まで、浸水に強い有芒種を一部、栽培していた。これらの品種にはノゲがあるので、人

と、『新編埼玉県史別編一民俗一』にもあるように、埼玉県全体でも、有芒種の芒やツタツカを対象として、作業が行われた。共同作業としてユイで行うものであり、数人が向かい合って、「ほれきた、ほれきた」

でふるったり、カゼタテなどといって風を利用してごみなどを取り除いた。<sup>(29)</sup>

力脱穀機で扱いた粳を「クルリボウでおして」ノゲを除いた。これをノゲオシといた。また、粳粒と穂切れ（カケマタという）、ワラシビ（葉の部分）などが混じったものを篩で選別すると、粳は下に落ちて、穂切れやワラシビが篩の網の上に残る。これをツタツカといい、これらを風であおってワラシビを飛ばすのをツタツカトバシといい、穂切れを筵に広げ、クルリボウで「おす」作業をツタツカオシといた。<sup>(28)</sup>

赤尾のノゲオシとツタツカオシも、脱芒と穂切れの処理を目的とするものであった。

大正以前の稲は、ノゲのある稲が多かったため、カナゴキで脱穀したのち、天気の良い日に筵に干し、ノゲや穂から落ちない粳をクルリボウで打って落とした。このあと藤篩（県

南地方ではツタツカブレイという

とはやし、移動しながら交互に打つもの<sup>(81)</sup>であった。東北には夜間の作業とするものがあつたが、ここでは日中の作業とするものが多い。

埼玉県同様、関東各地では、これは麦打ちと同じく唐竿の作業であつた。一部には、神奈川県内で「クルリで打つたり、サイツチで打つたりした<sup>(82)</sup>」という槌の併用例や、千歯扱きにかけた後、ヨコオ（参考 図1 A横打19）で「ポツチャラを叩いて芒を落した」という例もあり、埼玉県内にも、篩に残つた脱粒できなかつたチリを、唐竿で打つたり、木槌で叩いたりして脱粒した<sup>(83)</sup>という例がある。しかし、小規模に利用されることはあつても、主に唐竿が使用されたことに変わりはない。

ところでツタツカは、地域により、穂切れとも、篩の上に残るもの（穂切れと夾雑物）とも、屑ともいわれた。その理由は、赤尾で、穂切れであるカケマタが、作業の終盤でワラシビとともに篩の上に残り、結局はツタツカと呼ばれたことから推測できよう。ツタツカは、ポツチャラ、チリなどともいい、こうした説明の揺れはみな共通することから、これらは同義のものと思われることができる。

これら三者の分布はよくわかつていないが、目につくものを列挙する。ツタツカは、埼玉県ではさいたま市旧浦和市、旧岩槻市、北本市、戸田市、川越市、八潮市、三郷市、春日部市、千葉県では佐倉市に報告があり、ツタカが、前述の宮城県仙台市や福島市のほか、福島県双葉郡大熊町、岩手県奥州市旧胆沢郡胆沢町などにある。奥州市旧水沢市ではツタカのほかにシタカともいった。打つ作業をツタツカオシ<sup>(84)</sup>というのは、坂戸市、戸田市であり、三郷市ではツタツカウチ、川越市ではツタツカポウウチ、佐倉市ではツタツカブチ、大熊町ではツタカタタキといつた<sup>(85)</sup>。

ポツチャラは、埼玉県秩父郡皆野町、深谷市旧川本町、行田市、神奈

川県横須賀市、千葉県成田市、茨城県取手市、龍ヶ崎市、鹿嶋市、稲敷郡阿見町、群馬県千代田町、福島県いわき市、双葉郡富岡町、宮城県などにある。以上は、一部に麦も含む。神奈川県川崎市や平塚市ではボサラ、取手市では、ボツタラともいう。作業や用具をポツチャラブチという例（作業・成田市、用具・福島県西白川郡矢吹町）もある<sup>(86)</sup>。

チリと呼ぶのは、埼玉県日高市、所沢市、群馬県高崎市、神奈川県伊勢原市、川崎市、福島県などで、作業をチリウチ（高崎市、福島県麻郡磐梯町）、チリブチ（伊勢原市、磐梯町）、チリッポボーチ（所沢市）などといい、用具をチリブチボウ（福島県河沼郡会津坂下町）という<sup>(87)</sup>。

さて関東では、「靦おし」に類する呼称はほぼ見られず、まれにクルリボウオシ（埼玉県比企郡川島町）<sup>(88)</sup>、ボウオシ（千葉県流山市）<sup>(89)</sup>ともいうが、もっぱらノゲオシ、あるいははツタツカオシという。「○○おし」呼称以外に広げれば、ノゲトリ、ノゲオトシ、あるいはツタツカブチ、ポツチャラウチ、チリブチなどという。関東でも、有芒種の芒や穂切れなど特定の靦の処理に重点を置くものの、東北のような「靦おし」に類する呼称はほとんどなく、呼称に作業対象がよく表れている。一方、東北の「靦おし」呼称の地域では、穂切れの処理について、山形県でチグロヨシというものの、ツタツカオシは見当たらない。ただ福島県内で作業をツタカタタキ、チリウチ・チリブチ、用具をチリブチボウ、ポツチャラブチなどというように、「打つ」「叩く」という呼称のほうに作業対象がよく表れているように見える。

#### 「靦打ち」「靦おし」の用具

佐々木長生氏は、会津地方のモミヨウシの用具として、1 靦打ち棒、2 バツカラ（掛矢、槌状のもの）、3 手杵、4 突鋏、5 平刃靦ようし、

6クルリボウなどの六種を挙げている。<sup>(90)</sup>また、このうち、1・2・5を「粃叩き」、3・4を「芒落とし」と位置づけている。<sup>(91)</sup>これをもとに作成したのが、前掲図1「粃打ち、粃おしの用具」である。

さまざまな「粃打ち」用具がある中でも、会津地方は特別に多様であった。<sup>(92)</sup>①～⑥のうち、④突鉞、⑤平刃粃ようしなどは、独特のものと考えられ、③杵もこれほど多様な形のものとは他地域には少ないと思われる。一方、①粃打ち棒や②掛矢・槌は東北に広く分布している。②掛矢・槌は、図中の呼称のほか、ブチボ、タツブチなどとも呼ばれている。千葉県成田市（11モミブチオ）などの事例はあるものの、関東では木槌とする報告はあっても概して特徴あるものは少ない。

図1の「A横打」は、③掛矢・槌の変形ともいえるが、丁字形が独特である。21青森県東北町旧上北郡上北町のモミタタキや、22平川市旧南津軽郡平賀町のモミウチがある。岩手県奥州市旧胆沢郡胆沢町では、21と同様のものを「アオ槌」と呼んでいることから、アオや槌と呼ばれるものの中にこれが含まれている可能性もある。前述のとおり、関東でも神奈川県横須賀市でヨコオを用いて芒を落としたといい、これも「粃打ち」用具に加えられよう。<sup>(95)</sup>

図1の「Bマトリ」は、主として豆や雑穀に用いられるが、青森県むつ市旧下北郡河内町宿野部ではマドリで稲や豆を脱穀し、<sup>(96)</sup>三戸郡南部町旧名川町斗賀で枝付きの粃トチャラをサイツチやマドリで叩いたとい<sup>(97)</sup>い、八戸市でトツチャラを「マドリ（股になっている木）や槌で」叩いた<sup>(98)</sup>というから、これも「粃打ち」用具といえよう。

さらには、単独で用いられる③杵だけでなく、前述の青森県むつ市、西津軽郡深浦町、会津の只見町石伏のように、臼と杵との組み合わせも、ここに加えるべきであろう。そのことと合わせて、これらが関東の麦の

二次脱穀と比較されるべきものであることに注意したい。

### 三 穀物を「おす」こと

#### 稲束、草粃、押し粃

「粃おし」呼称が広く用いられていた青森県内の資料を見ていくと、「粃おし」の意義がより理解できる。次の資料は、青森県南部地方の、昭和五年の小作争議にかかる記事である。

刈り分け小作 南部地方（上北郡、下北郡、三戸郡八戸市）の大半には行はれてゐる。その分配方法は稲束を以てするものあり、又粃（草粃、押し粃）をもつてするものもある。<sup>(99)</sup>

「刈り分け」は、小作料として、「稲束」または「草粃」「押し粃」の一部を収める方法である。「草粃」とは、岩手県九戸郡軽米町の弘化四年『軽邑耕作鈔』の注によれば、「脱穀したばかりの粗（くさしね）で、葉先などの混入しているもの。芒や枝梗がついたものも多い」という。<sup>(100)</sup>

五戸地方では、粃には次のような段階、種類があったという。

クサモミ 稲扱きしたままの粃。穂をとったままの粃。

オシモミ 稲の穂を落して唐箕で下したのもの。また槌で打って粃通して落したのち唐箕にかけたもの。

トチャラ 通し箕に粃をかけてそれに止った草粃。または粃のついた層。

チリモミ 唐箕にかけた後の粃。これは世話人の収入になるという。クサモミより一俵につき二、三十銭安いという。<sup>(101)</sup>

オシモミはまた、「クサモミとは十貫で三十銭の差があった」という。<sup>(102)</sup>扱いただけのクサモミは枝梗、芒、塵を含んでおり、脱芒や乾燥、選別

の作業を経ることで、オシモミに調整された。オシモミとは、「おし」の工程をすませた粃であった。そして、トチャラも無価値ではないことは、各地の穂切れの処理にかけられた労力と重なる。

昭和になっても、地方には米が粃として貯蔵され、または流通する慣行が残っていた。<sup>(18)</sup>「草粃」「押し粃」は、脱穀作業の有無や程度を示すものであり、これらはこの地域の粃米流通と関わって、経済的価値と直結していた。「おす」という作業は、脱粒・脱芒に、俵への収納をならんで乾燥、選別などを伴っており、調整全般を担っていた。「扱く」ことは重要であるが、それは脱穀の一部分であり、「おす」ことなしには完結しないことを、オシモミは明確に示しているのである。

### 「おす」と「扱く」

冒頭に掲げた麦の脱穀法のうち、扱き落し法、打付け法による一次脱穀と、穂叩き法、穂搗き法による二次脱穀については、稲の脱穀にも共通する。そのうち、扱き落し法は、「おす」とは別物であった。「おす」と「扱く」とは、動作の違いもさることながら、技術の体系や導入時期の違いもあった。古島敏雄氏は、稲の脱穀が「扱く」作業で行われるようになったのは中世前期以来であるという。唐竿による作業については、「わが国では稲のばあい、『こく』という作業があらわれるとともに稲の脱穀にはつかわれなくなる」と述べているが、関東や東北の実状は、これまで述べてきたとおりである。

朝岡康二氏は、千歯扱きが普及する前の脱穀用具として、「扱管」「扱竹」「打ち台・臼・梯子」「唐棹・横槌・打ち棒・マトリ・つつき棒」などを挙げ、その展開を、次のように推測している。稲の収穫方法が穂刈りから根刈りに変わって藁を利用するようになると、もの（打ち台・

臼・梯子）に稲束を打ち付ける方法よりも、直接「はたき棒」や「横槌」で穂を叩く方法が好まれた。また、時代が下り、品種改良の結果、稲穂が徐々に脱穀しにくくなると、ある時期から叩く能率を上げるために、前もって荒く扱き落とすようになり、さらによい藁を得るために、「横槌」の作業の前工程に、「扱竹」による扱く作業が加えられた。こうした藁の利用面からも脱穀技術が規定される流れの中で登場した千歯扱きは、粃と桿とを截然と分かつのに向いていた。<sup>(19)</sup>そのため、その導入が脱穀に大きな影響を与えた。

ただし、元禄時代の竹製千歯扱きの発明後、鉄製品の登場によって脱穀の過程に革命的な変化が起こったものの、大坂を中心とする先進地は別として、各産地の段階的形成や商人の活動を経て、千歯扱きが全国に普及するには、明治途中までかかったという。<sup>(20)</sup>東北の場合、その普及が極端に遅いところもあった。たとえば前述のとおり津軽地方に千歯扱きが入ってきたのは明治で、それ以前は稲束を物に叩きつけて穂を落としていたといひ、むつ市小川原では明治末年であり、それ以前には太い割竹を用いていたという。この地の稲の脱穀は、打付け法や未熟な扱き落し法とともに、穂叩き法・穂搗き法の「おす」作業に長く支えられてきた。<sup>(21)</sup>関東も東北も、他地域よりも有芒種の栽培される割合が大きく、脱芒作業が必要であった。関東ではもっぱらノゲオシというのに対して、東北では「扱おし」に類する呼称が広く用いられていた。昭和になる頃には脱芒に作業の重点が移っていたにもかかわらず、この違いが生じた理由に、そのようなことが影響した可能性もあるのではないだろうか。

### おわりに

昭和二十年代に動力脱穀機が広く普及するまで、東日本には古い技術が残され、「粃おし」などの呼称や「おす」という表現が生き残っていた。もちろん「おす」というのは一部地域であるが、かつてはより広く存在した可能性がある。なによりも、穂の脱穀をトータルに「おす」として見ることで、「麦おし」からは麦の二次脱穀の唐竿と臼・杵との関係や、「おす」と「打つ」「搗く」との関係を知ることができた。そして「粃おし」からは稲の一次脱穀の「扱く」に対する二次脱穀の「おす」の意味について、少し具体的な像を示すことができたと考ええる。とはいえ、すべて机上の作業であり、民俗学の仕事としては誠に心もとない。ただ、乏しくとも自身の調査経験に照らしつつ、先人の調査報告や著述に書き留められた民俗語彙を組み合わせ、その意義を見出すことも、今また重要なことの一つであると考える。

#### 【謝辞】

ご教示を賜った飯塚好氏、大島建彦氏、小池淳一氏、佐々木長生氏、畠山豊氏、久野俊彦氏、執筆を勧めて下さった井上智勝氏に感謝申し上げます。一九九〇年代初め、関東民具研究会と東日本民俗担当学芸員研究会の合同研究会の場で、佐々木氏から福島県内の麦脱穀についてご説明をうかがったことが本稿につながった。改めてご学恩に感謝申し上げます。

- 1 『日本方言大辞典』小学館、一九八九／『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇三
- 2 小川直之「日本の脱穀具と脱穀法」『府中市農具展 農具は語る多摩の近代』府中市教育委員会、一九九三

- 3 拙稿「埼玉県における麦脱穀の作業呼称とその機能―『麦おし』『芒おし』と『クルリボウでおす』こと」『埼玉民俗』四八、二〇一三・三／「麦打ちの後処理または代替としての『麦おし』―臼と杵で『おす』麦脱穀の最終段階―『西郊民俗』二六三、二〇一三・六
- 4 『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇三
- 5 民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』平凡社、一九五五
- 6 柳田國男「寡婦と農業」（木綿以前の事）所収『柳田國男全集第九卷』筑摩書房、一九九八
- 7 同右
- 8 『日本国語大辞典』第二版に「ぼさら」の項目がある。
- 9 柳田國男「寡婦と農業」、前出6
- 10 たとえば福島県では、唐竿は中通りや浜通りでは使用されたが、会津では栃木県隣接地域だけで、むしろ「麦打棒」という勾配のある自然木が多く使用された（佐々木長生『会津農書』にみる麦の栽培と民俗―非文字資料としての農書・風俗帳―）神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター編『非文字資料研究』一八、二〇一九・九。
- 11 佐々木長生『会津農書』と脱穀用具（二）―モミヨウシについて―『民具マンスリー』二五・七、一九九二・二〇／同「扱ようし具、細腰杵」『ふくしまの農具』福島県立博物館、二〇〇一
- 12 佐々木氏が前述の文献でモミヨウシボウを「扱打ち棒」と表記したように、モミヨウシが「扱おし」と捉えられることはなかった。モミヨウシボウ展示の際、館長である久野氏が、それに「扱押し棒」という表記をあてる判断をした（『開館記念展 会津只見は民具がいつばい！ 一万点』たみ・モノとくらしのミュージアム企画展図録第1集、二〇一三）。
- 13 船水清「わがふるさと 新津軽風土記第五編」陸奥新報社、一九六三／『中里町誌』中里町、一九六五（以下、自治体史等、刊行者が自明の場合は略す）
- 14 『鶴田町誌下』一九七九
- 15 『昭和四十四年度津軽半島北部山村振興町村民俗資料緊急調査報告書』青森県教育委員会、一九七〇
- 16 船水清「わがふるさと 新津軽風土記第五編」前出13／原文「モミお棒し」（誤植）
- 17 原文「扱押し」（誤植）
- 18 「日返扱」は、「日帰り米」（庄司吉之助『福島県農業史』福島県農業復興会議



- 一四八)と同様、一定量を稲抜きから収納まで一日に終える作業法で、すべての稲抜き後に次作業に移る方法に対するもの。
- 19 折登岩次郎編『水元村誌』鶴田町水元支所、一九五六
- 20 『鶴田町誌下』前出14
- 21 『青森県民俗資料図録第五集 青森県の農具』青森県立郷土館、一九七八
- 22 『昭和四十四年度津軽半島北部山村振興町村民俗資料緊急調査報告書』青森県教育委員会、一九七〇
- 23 長尾角左衛門編『青森県北津軽郡三好村郷土誌』同刊行会、一九五七
- 24 『中里町誌』一九六五
- 25 『浪岡町史資料編五』一九七七
- 26 『倉石村史中巻』一九八九
- 27 工藤直巳『青森県の稲作』私家版、一九三八
- 28 『岩木川流域の民俗』(青森県史叢書)二〇〇八
- 29 『下北半島北通りの民俗』(青森県史叢書)二〇〇二
- 30 『下北半島西通りの民俗』(青森県史叢書)二〇〇三
- 31 『関の民俗調査報告書 青森県西津軽郡深浦町関』(青森県立郷土館調査報告第一六集民俗八)一九八四
- 32 『岩手県史第一巻』一九六五
- 33 『盛岡市通史』一九七〇
- 34 『遠野市史第四巻』一九七七
- 35 『文化財調査報告書第一六集』岩手県教育委員会、一九六六
- 36 加藤治郎『東北稲作史 東北稲作機械化前の技術と習俗』宝文堂、一九八三
- 37 細谷敬吉『山村風物詩其二 佐藤竜治遺稿より』陸前高田老人クラブ連合会編『陸前高田ものがたり第六集』同会、一九八六／『胆沢町史九民俗編二』一九八七／岩泉民間伝承研究会編『いわいずみふるさとノート一九八五』同会、一九八五・七
- 38 大麦の脱穀の「クルリ棒での作業は脱穀とノギ落としの両面」が必要である(大館勝治「いわゆるクルリボウについて」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』八、一九八六)といわれるとおり、ムギオシとノゲオシは同義であり、同じ作業に、地域によりいづれかの呼称が用いられた(拙稿「埼玉県における麦脱穀の作業呼称とその機能」)。
- 39 佐々木喜一郎『農業民俗』『宮城県史第一九民俗第一』一九五六
- 40 桜井右京編『農業民俗』『田尻町史』一九六〇
- 41 『仙台市史特別編六民俗』一九九八
- 42 武田知岳「修験道に関する年中行事―宮城県伊具郡丸森町」『あしなか』一三六、山村民俗の会、一九七三・二
- 43 加藤治郎『東北稲作史 東北稲作機械化前の技術と習俗』前出36
- 44 国重要無形民俗文化財・ユネスコ無形文化遺産の鹿角市八幡平小豆沢「大日堂舞楽」に「初押し」という演目がある(『無形文化財記録 芸能編2 民俗芸能 田楽ほか』文化庁、一九七二)。
- 45 高橋富治「昔百姓炉端話」『近代民衆の記録―農民』新人物往来社、一九七二
- 46 吉田三郎『もの言う百姓』慶友社、一九六三
- 47 吉田三郎『男鹿寒風山麓農民日録』(アチックミュージアム彙報一六)アチックミュージアム、一九三八
- 48 『西仙北町郷土誌 近代篇』一九七六
- 49 播磨弘宣『むらの歳時記 秋田・谷地新田の生活誌』(常民叢書6)日本経済評論社、一九八二
- 50 『河辺町郷土誌』一九六二
- 51 加藤治郎『東北稲作史 東北稲作機械化前の技術と習俗』前出36
- 52 『本荘市史文化・民俗編』二〇〇〇
- 53 『西木村郷土誌民俗編』二〇〇〇
- 54 『中仙町史文化編』一九八九
- 55 『横手平鹿総合郷土誌』東洋書院、一九八一
- 56 『明治十一年一月より十月 第二課事務簿(苗代手入方・種の拵方及び播種手入方)』『秋田県史資料明治編上』一九六〇
- 57 山形県方言研究会編『山形県方言辞典』同刊行会、一九七〇
- 58 同右
- 59 同右
- 60 『農業技術研究所報告日(二六)経営土地利用』(農林水産省農業技術研究所、一九六一・五)による、北平田農協青年部『農協たより』四六(一九五九・二)の引用記事
- 61 『すこし昔のくらし 吉野民俗風土記』南陽市吉野文化史研究会、一九八六
- 62 『南陽市史民俗編』一九八七
- 63 『水沢部落史』水沢公民館、一九八〇
- 64 『福島の民俗』福島市教育委員会、一九八一
- 65 『山都町史第三巻民俗編』一九八六

- 66 『岩代町史第四卷』一九八二
- 67 会津民俗研究会編『奥会津南郷の民俗』南郷村教育委員会、一九七二
- 68 同右
- 69 只見町石伏集落学術総合調査報告『湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗 只見町石伏集落学術総合調査報告』只見町、一九八四
- 70 『日本農書全集』会津農書、会津農書附録『農山漁村文化協会、一九八二』『会津農書』著者・佐瀬与次右衛門、翻刻・現代語訳・解説・庄司吉之助 注記・長谷川吉次
- 71 佐々木長生「会津と砺波の棒状農具の形態と機能―『会津農書』と『私家農業談』の農具を中心に―」『国際常民文化研究叢書一四』二〇一一
- 72 『会津農書』にあるとおり、この地域では「おす」が早くから「ようし」に置き換えられていたと考えられる。佐々木長生氏からは、福島県内にはモミヨウシ、ムギヨウシはあっても、「おし」「おす」という事例は聞いたことがないとご教示を得た。
- 73 佐々木長生「会津と砺波の棒状農具の形態と機能」前出71
- 74 『日本農書全集』会津農書 会津農書附録『前出70。原本は未確認であるが、別の二つの翻刻でも、「歴 ヨウフへ 禾稈芒麦等の穂つきのこと之を関東にては歴之春といふ也」(小野武夫編、伊藤書店、一九四四)、「歴 ようふへ。禾稈芒麦等の穂つきは関東にては歴之春とする也」(長谷川吉次編、佐瀬与次右衛門顕彰会、一九六八)とある。
- 75 「庄之春」を「おしの春」と振ったのは訳者であり、また、「ヨウフへ」と「よふし」との関係は不明であつて、さらに検討が必要である。
- 76 東洋大学民俗研究会編『西川の民俗 新潟県東蒲原郡上川村旧西川村』一九七六
- 77 「杵打ち」は、千葉県成田市(本文に示す)や大根博物館『調査研究報告五』(一九九三)、『流山市史近世資料編三』(一九九二)などに民具が見られ、『勝田市史編さん史料一 前渡村村史調査要項 明治四十二年十二月現在』(一九七二)に作業に関する記事が見られる。「おおし」は、「明治二十九年(推定)く三十二年雑司ヶ谷柳下家日記」(『豊島区史資料編四近代現代編』一九八二)に「杵押」の記述が見られるが、ほかに見当たらない。
- 78 拙稿「埼玉県坂戸市赤尾の『五月仕事』」『埼玉民俗』二五、二〇〇〇／「稲の脱穀・調製の作業工程と語彙」『埼玉民俗』二二、一九九六
- 79 『新編埼玉県史別編一民俗』一九八八
- 80 『入間市史民俗編』一九八一
- 81 『草加市史民俗編』一九八七
- 82 『神奈川県史各論編五民俗』一九七八
- 83 石黒幸雄・大島曉雄・田辺悟・辻井善弥「横須賀市長井の民俗」『横須賀市博物館研究報告一九人文科学』横須賀市自然・人文博物館、一九七六・二
- 84 『日高市史民俗編』一九八九
- 85 「浦和市大久保領家」『埼玉の民俗』(埼玉県民俗資料緊急調査) 埼玉県教育委員会、一九六六／『岩槻市史民俗史料編』一九八四／『本市史第六巻民俗編』一九八九／『戸田市史民俗編』一九八三／『川越市史民俗編』一九六八／『八潮市史民俗編』一九八五／『三郷市史第九巻別編民俗編』一九九一／『春日部市史第五巻民俗編』一九七八／『佐倉市史民俗編』一九八七／『大熊町史第一巻通史』一九八五／『胆沢町史八民俗編一』一九八五／『水沢市史六民俗』一九七八
- 86 中田稀介「皆野町近辺の戦前の麦作と農耕具の変遷」『埼玉民俗』五一、一九七五／新井栄作「川本村長在家の麦作と麦稈細工」同右／渡辺正一「行田市下須戸の麦作図会」同右／石黒ほか「横須賀市長井の民俗」前出83／『成田市史民俗編』一九八二／『取手市史民俗編三』一九八六／『龍ヶ崎市史民俗調査報告書一 長戸・大宮地区』一九八六／『鹿島町史第三巻』一九八一／『阿見の民俗 阿見町史編さん史料七』一九八一／『千代田村の民俗』(群馬県民俗調査報告書一四)、群馬県教育委員会、一九七二／『いわき市史第七巻民俗』一九七二／『富岡町史第一巻通史編』一九八八／『富岡町史第三巻考古・民俗編』一九八四／佐々木喜一郎「農業民俗」『宮城県史第一九民俗第一』一九五六／『川崎市史別編民俗』一九九一／『平塚市史別編民俗』一九八二／『取手市史民俗編三』一九八六／『目でみる矢吹町史』一九七五
- 87 『所沢市史民俗』一九八九／『群馬県史民俗一』一九八四／『伊勢原市史別編民俗』一九九七／『川崎市史民俗編』一九九一／『福島県史第二四巻各論編第一〇民俗第一』一九六七／『磐梯町史民俗編』一九九九／『会津坂下町史一民俗編』一九七四
- 88 「比企郡川島村上八ツ林」『埼玉の民俗』(埼玉県民俗資料緊急調査) 埼玉県教育委員会、一九六六
- 89 流山市立博物館編『流山市史民俗編』流山市教育委員会、一九九〇
- 90 佐々木長生『会津農書』と脱穀用具(二)―モミヨウシについて―『民具マンズリー』二五、七、一九九二・二〇〇〇／同「杵ようし具、細腰杵」『ふくしまの農具』福島県立博物館、二〇〇一
- 91 佐々木長生「会津・只見の民具」『国際常民文化研究叢書九 民具の名称に関する基礎的研究』二〇一五／脱粒と脱芒とを区別できるかどうか疑問である。

- 92 草野日出雄『写真で綴るいわきのくらし』はましん企画事業部、一九七四
- 93 『胆沢町史八民俗編一』前出85
- 94 石黒幸雄ほか「横須賀市長井の民俗」前出83
- 95 麦の脱穀にも用いられる（鈴木通大「クルリ棒・ヨコオ・麦打台拾遺」『神奈川県民俗調査報告二〇』一九九九／福沢武一「べー」『信州方言風物誌 第一 笛師とチョロッペ』柳沢書店、一九五六）。
- 96 『下北半島西通りの民俗』前出30
- 97 『馬淵川流域の民俗』（青森県史叢書）一九九三
- 98 『八戸市史民俗編』二〇一〇
- 99 『東奥年鑑 昭和五年』東奥日報社、一九三〇
- 100 百姓・淵沢園右衛門著。吉沢典夫翻刻・現代語訳・解題「軽邑耕作鈔」『日本農書全集二』農山漁村文化協会、一九八〇
- 101 能田多代子『青森県五戸語彙』国書刊行会、一九八二
- 102 能田多代子『みちのくの民俗 南部・五戸の話』津軽書房、一九六九
- 103 『大正二年日本主要農作物耕種要綱』（農商務省農務局編、大日本農会、一九一三）や、各地の民俗調査報告による。
- 104 『古島敏雄著作集第六卷 日本農業技術史』東京大学出版会、一九七五
- 105 古島敏雄「からさお 連枷」『国史大辞典』吉川弘文館、一九八三
- 106 朝岡康二『鉄製農具と鍛冶の研究 技術史的考察』一九八六
- 107 同右
- 108 船水清『わがふるさと 新津軽風土記第五編』前出13
- 109 『むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告書第二次 昭和四八年度』青森県教育委員会、一九七四
- 110 稲を臼に打ち付けることを青森・津軽ではカラミオトシ（前述）、岩手県大船渡市や滝沢市でウスガラムシ（『三陸町史第五巻民俗一般編』一九八八／福田武雄『農村中心の滝沢村誌』一九七四）といい、下閉伊郡岩泉町では麦を打付ける台をカラミダイという（岩泉民間伝承研究会編『いわいずみふるさとノート』一九八五）同会、一九八五・七）。現在まで、東北には打付け法を「おす」という例が見当たらない。
- 111 大町信『実用稲作新書』文武堂、一九〇六／大杉房吉『稲作実話 国家経済』青木嵩山堂、一九一一